

第3章 紀州徳川家の時代



名君の政治



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

徳川吉宗

徳川 吉宗は、2代藩主光貞の子で、頼宣の孫にあたります。吉宗は、初め新之助、その後松平頼方と名乗りました。1705(宝永2)年5月に兄の綱教(3代藩主)、9月に頼職(4代藩主)とあいついで死去したため、5代目の紀州藩主になり、徳川吉宗と改めました。吉宗は、1716(享保元)年に8代将軍になったので、紀州藩主時代はわずか11年間ですが、その間、藩の財政を建て直すために熱心に藩政改革を行いました。

吉宗が藩主になった頃に紀州藩の財政は、たいへん悪い状態でした。その傾向は、1668(寛文8)年に幕府から10万両を借りたときからはじまっていました。その後、1682(天和2)年、1695(元禄8)年、1703年と3度も江戸屋敷が焼けたときの再建費や、5代将軍綱吉の娘鶴姫が綱教に嫁いだための諸費用、綱吉が2度も紀州藩邸を訪れたときの接待費など、たくさんのお金が続いていました。

このような財政を建て直すため、吉宗は質素倹約を命じ、自ら模範となる生活をしました。吉宗の倹約は、衣類から食事にも見られ、家臣の贅沢も取り締まりました。そのため、和歌山城下に藩士を取り締まる横目20人を置いて巡回させ、藩士の子どもが絹の服装をしているのを見つけると吉宗に報告し、吉宗は親を呼び出して木綿だけを着用するよう教え戒めました。また、1707年から家臣に対して20分の1の差上金を命じ、家禄の20分の1を藩に上納させるとともに、町人や農民からも御用金や新税を取り立てました。さらに翌年には、茶坊主や手代、小役人等80人の人員整理を行い、無駄な費用を節約しました。

吉宗が倹約をすすめたのは、藩士に対してであって、町人や農民には倹約を強制しませんでした。それは、町人や農民は自分で家屋敷や田畑を求め、それぞれの仕事をしているのであって、大名の世話にならないからと自由にさせたのです。特に町人は、毎日利益を考えながら生計を立てているので、贅沢な生活をするはずがないというものでした。そして、他所の者と商取引があるから、着物や贈答品等も勝手次第にさせ、家構えも商売に必要なため、どのような立派な建築でも認めました。

また、井沢弥惣兵衛為永や大畑才蔵などの才能のある者を登用し、亀池(海南市)の築造や小田井用水などの掘削を担当させ、広大な新田を開発して年貢の増収をはかりました。



徳川吉宗像

徳川治宝

1789（寛政元）年、養父の9代藩主貞が死去し、8代重倫の子治宝が10代藩主になりました。治宝も藩の財政を建て直すために倹約を奨励するとともに、吉宗が設立した藩校講釈所（湊講堂）を改修・増築して学習館と改称し、自筆の扁額（門や室内に掲げる横に長い額）を与えました。1792年には城下に医学館を設け、翌年には江戸屋敷内に明教館を、さらに1794年には

松坂に松坂郷校を設立して、藩士や庶民の教育につとめました。また、本居宣長を松坂より招き、1806（文化3）年に「紀伊統風土記」の編纂にかかりました。仁井田南陽を総裁にして、仁井田長群（源一郎）、本居大平、本居内遠、加納諸平らを纂修に任じ、当時の儒学、国学、本草学の学者を総動員した編纂事業で30年余の歳月をかけて1839（天保10）年に完成させました。

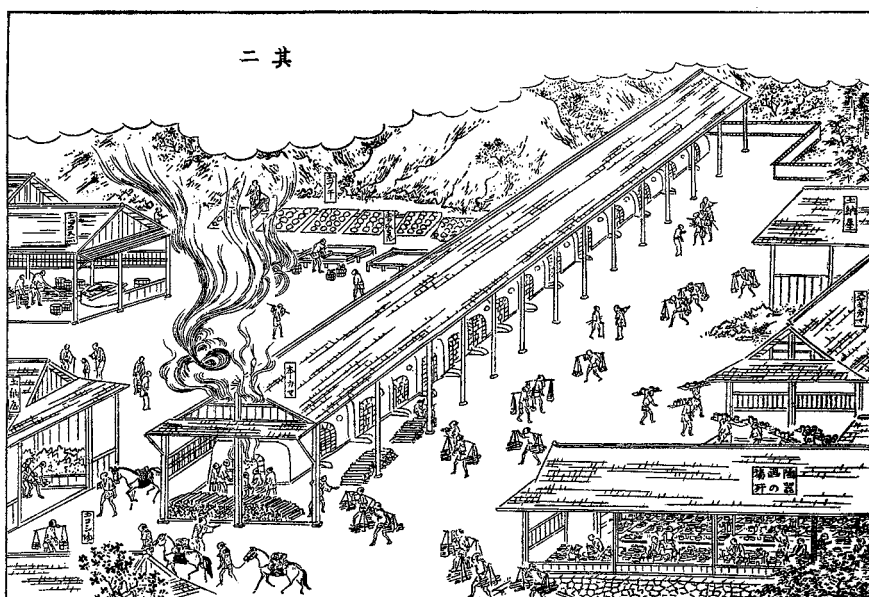
治宝は1824（文政7）年に隠居しますが、藩の実権を養子の斉順（11代・将軍家斉7男）・斉彊（12代・家斉21男）・慶福（13代）に譲らず、1852（嘉永5）に死去するまで握り続けました。治宝は、財政を再建するための殖産興業政策の一つとして、1827年、崎山利兵衛に有田郡上中野（広川町）に陶器場を開かせました（南紀男山焼）。この時期、藩は国産の陶磁器生産の育成を図り、製品を各地に販売したいと考えていたようです。治宝は焼物について関心が深く、これ以前から京都より有名な陶工を招いています。

1827年に西浜御殿の普請が完成すると、治宝は正式の隠居所とし、藩の中樞もここに移りました。ちなみに、大名庭園の形式がよく保存され、海水を引き入れた池泉回遊式庭園の養翠園も、1819年に治宝が西浜御殿の造営・改修したところにつくられたと思われます。

なお、1846（弘化3）年7月に落雷によって焼失した和歌山城天守閣は、治宝の願いによって特別に再

建が許可されました。当時、幕府が原則的に天守閣再建を許していませんでした。1850年6月、天守閣が落成しました。治宝は、同年10月には片男波（和歌山市）の「和歌御旅所」の移転と、和歌浦東照宮からの「御道筋」の改修普請を命じています。この工事に連関して、御旅所裏道には石橋が架けられ、治宝の長寿を記念して「不老橋」と名付けられました。

このように、江戸時代の紀州文化史上に果たした治宝の役割は大きかったといえるでしょう。



男山陶器場『紀伊国名所図会』



不老橋